

この出入口のこと知ってる？

阪神高速の出入口再発見！

にしのみややまぐちひがし「西宮山口東」

7号北神戸線〔西宮山口東出入口〕

「溜め漉き」の手法で名塩紙を漉いていく、谷徳製紙所の代表で紙漉き職人の谷野雅信さん。簀笥を漉き舟の中に入れて漉き草（紙料液をすくい上げ、水を切るといふ作業を2回繰り返して1枚の和紙になる。写真の漉き草には、名塩で採れる青（カブタ土）の泥土が入っている。できあがった和紙は東大寺に納められ、修二会で配られるお札になるそう。



西宮名塩地域は、江戸時代から続く紙漉きの里。 地元で採れる雁皮、泥土を使って和紙を漉く

名塩の紙漉きは、江戸時代前期の俳諧書『毛吹草』（1645年）や『摂津名所記』（1655年）に名塩紙の記述があることから、江戸時代の初めには行われていたことがわかります。名塩で紙漉きが始まった経緯には諸説ありますが、地元では名塩出身の東山弥右衛門が、越前国現在の福井県から紙漉きの技を持ち帰り広めたという説が有力です。当時、高い紙漉き技術を誇った越前では、その技は門外不出。他国の者には教えてもらえませんでした。なんとか紙漉きの技術を身につけたかった弥右衛門は、越前へ出向き土地の女性と結婚、婿入りすることで技を習得します。そして故郷へ戻り、紙漉きの技術を村人に伝授。やがて弥右衛門は名塩紙の祖と呼ばれ、名塩の紙漉きは一大産業となっていくます。ただその影には、水上勉の『名塩川』にも描かれた悲しい物語も伝わります。弥右衛門は妻子を越前に置き去りにして名塩に戻ったため、夫を慕う妻子が名塩まで追ってきます。しかし村人は他国の者を村に入れることはできぬと追い返し、嘆き悲しんだ妻は身

越前から伝わったとされる紙漉き

7号北神戸線・西宮山口東出入口を東へ出た山あいの地、西宮名塩地域では、昔も今も、変わらぬ製法で和紙がつくられ続けています。西宮市立郷土資料館学芸員の上原康生さん、谷徳製紙所の谷野雅信さんに名塩紙について聞きました。

四季のある地の生き物にとって、今は厳しい季節です。体が小さいと、凍てつく空気にすぐに体温が奪われます。そこでスズメなど、この時期は膨らませた羽毛に空気を溜め、暖かさをできるだけ逃がさないようにしています。「ふくら雀」は冬の季語です。凜とした空に誘われ、野山や河原に出てみると、人も分厚い上着で膨れています。中には双眼鏡を首からかけている人も。鳥見には良いコンディションです。北のもつと厳しい寒さを逃れた鳥たちが渡つてきますし、葉を落とした樹木にとまる小鳥の姿は見つけやすい。枝の間を活発に飛び交つてくれるのも観察に好都合です。

小鳥たちの冬来たる

冬に小鳥が活動的なのは、短くなった昼の時間をもつぱらエサ探しに費やすからで、食べるほどに体が熱を作り出してくれます。ですがこの季節、エサの量がグンと減ります。春夏秋とお腹を満たしてくれた虫たちは今は姿を隠していますし（鳥よりもっと小さい虫が、活動に必要体温を保つのは至難の業です）、植物に目を向けても、食べられる木の実や種子が新しくできるのは春になってからのこと。お腹が空くと凍えてしまう。そんな冬を乗り越えるため、鳥には「貯食」をするものがあります。危殆に類して頼りになるのは蓄えです。モズの早贄はその一つ。ヤマガラやコガラといったカ

ラ類の小鳥は、秋のうちに見つけたたくさん種子を一部食べずにとっておき、冬に備えて地面や木の皮の間などに隠します。1羽で数万の種子を貯めるという話もあり、隠し場所の数も膨大です。それでこの鳥たちは、場所の記憶を司る海馬という脳の器官が、シジュウカラなど貯食をしない他のカラ類と比べて、大きく発達しています。おかげで大事な食べ物のありかを覚えていられるのです。クマならば、冬が来る前、実りの秋にたらふく食べて、体に栄養を蓄えるところですが、それは鳥の生き方ではありません。空を自由に飛ぶのなら、重い体は足枷です。ヤマガラたちは体の外にエサを貯め、小さな体と優れた記憶で冬に立ち向かっています。

中田兼介 なかたけんすけ（京都女子大学教授）

1967年大阪生まれ。博士（理学）。専門は動物行動学・生態学。現在日本動物行動学会会長かつ日本蜘蛛学会会長。著書に「もえる！いきものりくつ」（ミシマ社）「小説みたいに楽しく読める生態学講義」（羊土社）など

関西とともにー〔阪神ハイウェイ〕
HANSHIN
HIGHWAY

2026 WINTER
vol.
240



～阪神高速のある風景～
第5回 阪神高速フォトコンテスト最優秀賞写真

CONTENTS

エッセイ●季節の言葉

小鳥たちの冬来たる 中田兼介

この出入口のこと知ってる？●阪神高速の出入口再発見！

にしのみややまぐちひがし 〔西宮山口東〕

7号北神戸線〔西宮山口東出入口〕

西宮名塩地域は、江戸時代から続く紙漉きの里
地元で採れる雁皮、泥土を使って和紙を漉く

関西の名工

中村佳之さん（京こま職人）

色鮮やかな平紐を巻き付けてつくる
京都らしい、京都ならではの、京こま

教えてセンセイ

吉川 徹さん（大阪大学大学院教授）

日本でもっとも罪深いひのえうま迷信
そこには社会学的なメカニズムが存在しました

阪神高速の取り組み

コスバ、タイパの最強企画でお客さまと地域をつなぐ

〔阪神高速おでかけパス〕は 関西圏の振興と活性化に貢献します

ちょっと行ってみたい関西うまいもん

海老芋 ●大阪府富田林市

Hanshin Highway TIMES

ARアプリで未来の道をのぞこう！



表紙イラスト（谷徳製紙所の紙漉きの様子）
ヤマサキタツヤ：大阪生まれ大阪育ちのイラストレーター。誌面やWebなど各媒体で活動。
「来た見た食うた 大台南見聞録」（書肆侃侃房）など主に台湾に関する書籍を出版。

を投げて亡くなったといえます。

越前と名塩の紙漉きの大きな違いは、

名塩では村落周辺から産出する凝灰岩（神戸層群第二凝灰岩）をすりつぶした泥土を原料に入れることです。太古の昔、

名塩から西に広がる地域には古神戸湖という湖があり、湖の底に山陰から流れてきた火山灰が堆積してできた凝灰岩が昔も今もこのあたりでとれるのです。凝灰岩の風化の度合いによって泥土には、白（東久保土、青（カブタ土）、黄（尼子土）、茶（蛇豆土）の4色があり、さらに白と黄を混ぜた白茶と呼ぶ土を加えた5色の土を使い分けて和紙を製作します。これは、ほかにはない名塩紙独自の製法です。ちなみに、青い土を採っていた場所は、洞穴になって阪急バス名塩西ノ口停留所近くに残っています（立ち入り不可）。泥土を入れることで、どっしりした風合いが生まれるうえ、日光を遮って変色しづらく、酸化を防いで虫害が起こりにくく（シミ予防）、長期保存に耐えうる堅牢な紙ができあがります。また、しっとりした湿り気がでるので熱に強く燃えにくい紙になるともいわれています。

名塩紙の主原料である雁皮が、周辺の六甲山系で自生しているのも紙漉きの里として大きなポイントです。和紙の三大原料のうち、楮、みつまたは栽培が可能ですが、雁皮は栽培が難しく自生しているものを採取するしかありません。そのため雁皮を主原料とする産地は希少です。雁皮は繊維が短く、半透明で光沢

があつて、きめ細かな紙肌を持つ和紙に仕上がります。

藩札に使われた偽造されない紙

雁皮と泥土を使った名塩紙は、江戸時代には、ふすまや屏風用、書画用紙などとして珍重されました。なかでも名塩紙が藩札の原紙として使われたことは特筆すべきです。藩札とは各藩が発行した地元で使用する地域紙幣です。名塩紙には、他にはない泥土が漉き込まれていることで、偽造防止になったのです。尼崎藩や三田藩などをはじめ、遠くは鹿児島藩（薩摩国）、臼杵藩（豊後国）など西国各地の藩がこぞって藩札としての原紙として使用し、「名塩は西の造幣局」とも呼ばれました。

当時、「名塩千軒」と称されるほど栄え二一ズが高まるなか、名塩の紙漉き職人たちは株仲間をつくって、過剰に生産しすぎて紙の価格が下落しないよう漉き舟の数を管理したり、販売先の取り決めをつくるなど、協力する手立てもとっていました。家業を継続し、地域として名塩の紙漉き業を後世に残すための対応ですね。

名塩紙のつくり方は、雁皮の表面の黒い皮、残った薄い白い皮をていねいに手作業で取り除くことから始まります。それを時間をかけて釜で煮て、手でちぎることができるようにならなくなったら、チリやゴミを徹底的に取り除き、叩いて

ほぐします。その雁皮と泥土に、糊のような役割をするノリウツギの木の皮から採った粘液（ネリ）を加えて、漉き草（紙料液）を用意します。

そしていよいよ漉きの作業です。名塩紙は「溜め漉き」という手法で漉かれます。漉き草をよく混ぜたら、簀桁をそつと漉き草の中に入れてそのままゆっくりと引き上げ、水が落ちるのを待ちます。糸などで吊った簀桁を上下にパシャパシャと揺らして漉く「流し漉き」が全国的に主流のなか、溜め漉きでは簀桁を手の力だけで持ち、大きく揺らさず簀桁の上で紙が均等に溜まるように漉いていきます。

明治に入り、洋紙が登場すると和紙の需要は次第に減少していきます。しかし現在も、2軒の工房で変わらぬ紙漉き



漉いて水を切った和紙は翌日、板に貼り付け天日で干す。雁皮は急激に乾燥させると板からはがれやすいため、蒸気を使った効率のいい機械乾燥ができない。今も一枚一枚、日光に当てて自然に乾燥させる。



江戸時代の藩札。分厚く漉いたり、色をつけて染め上げたり、透かしを入れるなどさまざまな技法を駆使して漉かれた。



写真左/西宮市立郷土資料館・学芸員の上原康生さん。写真右/谷徳製紙所の谷野雅信さん。
谷徳製紙所
兵庫県西宮市名塩2-2-23
TEL:0797-61-0224(紙漉き体験も可・要予約)



★教行寺
室町時代に、浄土真宗本願寺中興の祖といわれる蓮如上人によって創建された由緒ある寺。寺には、つながりの深かった諸大名や京都の公家と取り交わした書状など貴重な資料が多く残る。名塩御坊とも呼ばれ、名塩の家並みが見下ろせる高台に建ち、270年前に建てられた現在の本堂は、西本願寺阿弥陀堂を建てた宮大工が手がけたもの。太鼓楼もあり、かつては太鼓をならして時を知らせたという。



木之元地蔵尊 木元寺

塩瀬中央公園

西宮名塩

JR宝塚線

武庫川

生瀬

ウエルキンソン記念館

WILKINSON

大阪

名塩八幡神社

谷徳製紙所

名塩和紙学習館

西宮山口東出入口

阪神高速7号北神戸線

金仙寺湖

西宮山口南

★名塩八幡神社

創建年は不明だが、文明年間(1469~1486)以前と推定される。現在確認できる一番古い年号は、石の鳥居の寛延4(1751)年の銘。明治12年には、岩倉具視が石灯笼一對と提灯一對を奉納している。専任の神職がおらず、塩田八幡宮の神職が兼任して神事を執り行い、通常の神社の管理は「宮守(みやもり)」と呼ばれる地域の7町から選出された氏子が担う。毎年、成人の日の1月15日に近い日曜日が祝日に行なわれる左義長(とんど)は、高さ5m~6mの円錐形に組み上げた竹に早朝4時半頃から点火して行われ、多くの人々で賑わう。

★名塩八幡神社

★木之元地蔵尊 木元寺

聖徳太子が鎮護国家のため、一木で三体の地蔵尊を刻み3カ所に納めた。その一体が名塩の木元寺にある木之元地蔵尊であると伝えられる。室町時代、摂津、播磨、備前美作を支配する守護大名だった赤松則村円心が、勝軍地蔵として伽藍をここに創建。地蔵尊が火事で赤ん坊にふりかかる炎を懸念に払って命を守ったという伝説が残り、「火伏地蔵」と呼ばれ親しまれる。その時に付いた傷跡が、今も地蔵尊の頬と左の衣に残っているとされる。

★ウエルキンソン記念館

イギリス人の実業家クリフォード・ウィルキンソンが、明治22年ごろ宝塚で炭酸鉱泉を見つけて「炭酸水」の製造・販売を開始。明治37年、源泉が枯渇したため、鉱泉水がふんだんに湧き出す西宮市生瀬に工場を移転した。白い外壁、赤い柱が印象的な工場は、西宮北部のランドマークとして長く愛された。平成2年に工場は閉鎖、平成7年に解体。跡地にウエルキンソン記念館が建設され、ウィルキンソンにゆかりのある品々が展示されている。

★谷徳製紙所

名塩紙の特徴を生み出す、名塩周辺で採れる凝灰岩。左から、黄(尼子土)、白(東久保土)、青(カブタ土)、茶(蛇豆土)。

写真左/西宮市立郷土資料館・学芸員の原康生さん。写真右/谷徳製紙所の谷野雅信さん。

谷徳製紙所
兵庫県西宮市名塩2-2-23
TEL:0797-61-0224(紙漉き体験も可・要予約)

★名塩八幡神社

創建年は不明だが、文明年間(1469~1486)以前と推定される。現在確認できる一番古い年号は、石の鳥居の寛延4(1751)年の銘。明治12年には、岩倉具視が石灯笼一對と提灯一對を奉納している。専任の神職がおらず、塩田八幡宮の神職が兼任して神事を執り行い、通常の神社の管理は「宮守(みやもり)」と呼ばれる地域の7町から選出された氏子が担う。毎年、成人の日の1月15日に近い日曜日が祝日に行なわれる左義長(とんど)は、高さ5m~6mの円錐形に組み上げた竹に早朝4時半頃から点火して行われ、多くの人々で賑わう。

★名塩八幡神社

★木之元地蔵尊 木元寺

聖徳太子が鎮護国家のため、一木で三体の地蔵尊を刻み3カ所に納めた。その一体が名塩の木元寺にある木之元地蔵尊であると伝えられる。室町時代、摂津、播磨、備前美作を支配する守護大名だった赤松則村円心が、勝軍地蔵として伽藍をここに創建。地蔵尊が火事で赤ん坊にふりかかる炎を懸念に払って命を守ったという伝説が残り、「火伏地蔵」と呼ばれ親しまれる。その時に付いた傷跡が、今も地蔵尊の頬と左の衣に残っているとされる。

★ウエルキンソン記念館

イギリス人の実業家クリフォード・ウィルキンソンが、明治22年ごろ宝塚で炭酸鉱泉を見つけて「炭酸水」の製造・販売を開始。明治37年、源泉が枯渇したため、鉱泉水がふんだんに湧き出す西宮市生瀬に工場を移転した。白い外壁、赤い柱が印象的な工場は、西宮北部のランドマークとして長く愛された。平成2年に工場は閉鎖、平成7年に解体。跡地にウエルキンソン記念館が建設され、ウィルキンソンにゆかりのある品々が展示されている。

★谷徳製紙所

名塩紙の特徴を生み出す、名塩周辺で採れる凝灰岩。左から、黄(尼子土)、白(東久保土)、青(カブタ土)、茶(蛇豆土)。

写真左/西宮市立郷土資料館・学芸員の原康生さん。写真右/谷徳製紙所の谷野雅信さん。

谷徳製紙所
兵庫県西宮市名塩2-2-23
TEL:0797-61-0224(紙漉き体験も可・要予約)

★名塩八幡神社

創建年は不明だが、文明年間(1469~1486)以前と推定される。現在確認できる一番古い年号は、石の鳥居の寛延4(1751)年の銘。明治12年には、岩倉具視が石灯笼一對と提灯一對を奉納している。専任の神職がおらず、塩田八幡宮の神職が兼任して神事を執り行い、通常の神社の管理は「宮守(みやもり)」と呼ばれる地域の7町から選出された氏子が担う。毎年、成人の日の1月15日に近い日曜日が祝日に行なわれる左義長(とんど)は、高さ5m~6mの円錐形に組み上げた竹に早朝4時半頃から点火して行われ、多くの人々で賑わう。

★名塩八幡神社

★木之元地蔵尊 木元寺

聖徳太子が鎮護国家のため、一木で三体の地蔵尊を刻み3カ所に納めた。その一体が名塩の木元寺にある木之元地蔵尊であると伝えられる。室町時代、摂津、播磨、備前美作を支配する守護大名だった赤松則村円心が、勝軍地蔵として伽藍をここに創建。地蔵尊が火事で赤ん坊にふりかかる炎を懸念に払って命を守ったという伝説が残り、「火伏地蔵」と呼ばれ親しまれる。その時に付いた傷跡が、今も地蔵尊の頬と左の衣に残っているとされる。

★ウエルキンソン記念館

イギリス人の実業家クリフォード・ウィルキンソンが、明治22年ごろ宝塚で炭酸鉱泉を見つけて「炭酸水」の製造・販売を開始。明治37年、源泉が枯渇したため、鉱泉水がふんだんに湧き出す西宮市生瀬に工場を移転した。白い外壁、赤い柱が印象的な工場は、西宮北部のランドマークとして長く愛された。平成2年に工場は閉鎖、平成7年に解体。跡地にウエルキンソン記念館が建設され、ウィルキンソンにゆかりのある品々が展示されている。

★谷徳製紙所

名塩紙の特徴を生み出す、名塩周辺で採れる凝灰岩。左から、黄(尼子土)、白(東久保土)、青(カブタ土)、茶(蛇豆土)。

写真左/西宮市立郷土資料館・学芸員の原康生さん。写真右/谷徳製紙所の谷野雅信さん。

谷徳製紙所
兵庫県西宮市名塩2-2-23
TEL:0797-61-0224(紙漉き体験も可・要予約)

★名塩八幡神社

創建年は不明だが、文明年間(1469~1486)以前と推定される。現在確認できる一番古い年号は、石の鳥居の寛延4(1751)年の銘。明治12年には、岩倉具視が石灯笼一對と提灯一對を奉納している。専任の神職がおらず、塩田八幡宮の神職が兼任して神事を執り行い、通常の神社の管理は「宮守(みやもり)」と呼ばれる地域の7町から選出された氏子が担う。毎年、成人の日の1月15日に近い日曜日が祝日に行なわれる左義長(とんど)は、高さ5m~6mの円錐形に組み上げた竹に早朝4時半頃から点火して行われ、多くの人々で賑わう。

★名塩八幡神社

★木之元地蔵尊 木元寺

聖徳太子が鎮護国家のため、一木で三体の地蔵尊を刻み3カ所に納めた。その一体が名塩の木元寺にある木之元地蔵尊であると伝えられる。室町時代、摂津、播磨、備前美作を支配する守護大名だった赤松則村円心が、勝軍地蔵として伽藍をここに創建。地蔵尊が火事で赤ん坊にふりかかる炎を懸念に払って命を守ったという伝説が残り、「火伏地蔵」と呼ばれ親しまれる。その時に付いた傷跡が、今も地蔵尊の頬と左の衣に残っているとされる。

★ウエルキンソン記念館

イギリス人の実業家クリフォード・ウィルキンソンが、明治22年ごろ宝塚で炭酸鉱泉を見つけて「炭酸水」の製造・販売を開始。明治37年、源泉が枯渇したため、鉱泉水がふんだんに湧き出す西宮市生瀬に工場を移転した。白い外壁、赤い柱が印象的な工場は、西宮北部のランドマークとして長く愛された。平成2年に工場は閉鎖、平成7年に解体。跡地にウエルキンソン記念館が建設され、ウィルキンソンにゆかりのある品々が展示されている。

★谷徳製紙所

名塩紙の特徴を生み出す、名塩周辺で採れる凝灰岩。左から、黄(尼子土)、白(東久保土)、青(カブタ土)、茶(蛇豆土)。

写真左/西宮市立郷土資料館・学芸員の原康生さん。写真右/谷徳製紙所の谷野雅信さん。

谷徳製紙所
兵庫県西宮市名塩2-2-23
TEL:0797-61-0224(紙漉き体験も可・要予約)

★名塩八幡神社

創建年は不明だが、文明年間(1469~1486)以前と推定される。現在確認できる一番古い年号は、石の鳥居の寛延4(1751)年の銘。明治12年には、岩倉具視が石灯笼一對と提灯一對を奉納している。専任の神職がおらず、塩田八幡宮の神職が兼任して神事を執り行い、通常の神社の管理は「宮守(みやもり)」と呼ばれる地域の7町から選出された氏子が担う。毎年、成人の日の1月15日に近い日曜日が祝日に行なわれる左義長(とんど)は、高さ5m~6mの円錐形に組み上げた竹に早朝4時半頃から点火して行われ、多くの人々で賑わう。

★名塩八幡神社

★木之元地蔵尊 木元寺

聖徳太子が鎮護国家のため、一木で三体の地蔵尊を刻み3カ所に納めた。その一体が名塩の木元寺にある木之元地蔵尊であると伝えられる。室町時代、摂津、播磨、備前美作を支配する守護大名だった赤松則村円心が、勝軍地蔵として伽藍をここに創建。地蔵尊が火事で赤ん坊にふりかかる炎を懸念に払って命を守ったという伝説が残り、「火伏地蔵」と呼ばれ親しまれる。その時に付いた傷跡が、今も地蔵尊の頬と左の衣に残っているとされる。

★ウエルキンソン記念館

イギリス人の実業家クリフォード・ウィルキンソンが、明治22年ごろ宝塚で炭酸鉱泉を見つけて「炭酸水」の製造・販売を開始。明治37年、源泉が枯渇したため、鉱泉水がふんだんに湧き出す西宮市生瀬に工場を移転した。白い外壁、赤い柱が印象的な工場は、西宮北部のランドマークとして長く愛された。平成2年に工場は閉鎖、平成7年に解体。跡地にウエルキンソン記念館が建設され、ウィルキンソンにゆかりのある品々が展示されている。

★谷徳製紙所

名塩紙の特徴を生み出す、名塩周辺で採れる凝灰岩。左から、黄(尼子土)、白(東久保土)、青(カブタ土)、茶(蛇豆土)。

写真左/西宮市立郷土資料館・学芸員の原康生さん。写真右/谷徳製紙所の谷野雅信さん。

谷徳製紙所
兵庫県西宮市名塩2-2-23
TEL:0797-61-0224(紙漉き体験も可・要予約)

★名塩八幡神社

創建年は不明だが、文明年間(1469~1486)以前と推定される。現在確認できる一番古い年号は、石の鳥居の寛延4(1751)年の銘。明治12年には、岩倉具視が石灯笼一對と提灯一對を奉納している。専任の神職がおらず、塩田八幡宮の神職が兼任して神事を執り行い、通常の神社の管理は「宮守(みやもり)」と呼ばれる地域の7町から選出された氏子が担う。毎年、成人の日の1月15日に近い日曜日が祝日に行なわれる左義長(とんど)は、高さ5m~6mの円錐形に組み上げた竹に早朝4時半頃から点火して行われ、多くの人々で賑わう。

★名塩八幡神社

★木之元地蔵尊 木元寺

聖徳太子が鎮護国家のため、一木で三体の地蔵尊を刻み3カ所に納めた。その一体が名塩の木元寺にある木之元地蔵尊であると伝えられる。室町時代、摂津、播磨、備前美作を支配する守護大名だった赤松則村円心が、勝軍地蔵として伽藍をここに創建。地蔵尊が火事で赤ん坊にふりかかる炎を懸念に払って命を守ったという伝説が残り、「火伏地蔵」と呼ばれ親しまれる。その時に付いた傷跡が、今も地蔵尊の頬と左の衣に残っているとされる。

★ウエルキンソン記念館

イギリス人の実業家クリフォード・ウィルキンソンが、明治22年ごろ宝塚で炭酸鉱泉を見つけて「炭酸水」の製造・販売を開始。明治37年、源泉が枯渇したため、鉱泉水がふんだんに湧き出す西宮市生瀬に工場を移転した。白い外壁、赤い柱が印象的な工場は、西宮北部のランドマークとして長く愛された。平成2年に工場は閉鎖、平成7年に解体。跡地にウエルキンソン記念館が建設され、ウィルキンソンにゆかりのある品々が展示されている。

★谷徳製紙所

名塩紙の特徴を生み出す、名塩周辺で採れる凝灰岩。左から、黄(尼子土)、白(東久保土)、青(カブタ土)、茶(蛇豆土)。

写真左/西宮市立郷土資料館・学芸員の原康生さん。写真右/谷徳製紙所の谷野雅信さん。

谷徳製紙所
兵庫県西宮市名塩2-2-23
TEL:0797-61-0224(紙漉き体験も可・要予約)

★名塩八幡神社

創建年は不明だが、文明年間(1469~1486)以前と推定される。現在確認できる一番古い年号は、石の鳥居の寛延4(1751)年の銘。明治12年には、岩倉具視が石灯笼一對と提灯一對を奉納している。専任の神職がおらず、塩田八幡宮の神職が兼任して神事を執り行い、通常の神社の管理は「宮守(みやもり)」と呼ばれる地域の7町から選出された氏子が担う。毎年、成人の日の1月15日に近い日曜日が祝日に行なわれる左義長(とんど)は、高さ5m~6mの円錐形に組み上げた竹に早朝4時半頃から点火して行われ、多くの人々で賑わう。

★名塩八幡神社

★木之元地蔵尊 木元寺

聖徳太子が鎮護国家のため、一木で三体の地蔵尊を刻み3カ所に納めた。その一体が名塩の木元寺にある木之元地蔵尊であると伝えられる。室町時代、摂津、播磨、備前美作を支配する守護大名だった赤松則村円心が、勝軍地蔵として伽藍をここに創建。地蔵尊が火事で赤ん坊にふりかかる炎を懸念に払って命を守ったという伝説が残り、「火伏地蔵」と呼ばれ親しまれる。その時に付いた傷跡が、今も地蔵尊の頬と左の衣に残っているとされる。

★ウエルキンソン記念館

イギリス人の実業家クリフォード・ウィルキンソンが、明治22年ごろ宝塚で炭酸鉱泉を見つけて「炭酸水」の製造・販売を開始。明治37年、源泉が枯渇したため、鉱泉水がふんだんに湧き出す西宮市生瀬に工場を移転した。白い外壁、赤い柱が印象的な工場は、西宮北部のランドマークとして長く愛された。平成2年に工場は閉鎖、平成7年に解体。跡地にウエルキンソン記念館が建設され、ウィルキンソンにゆかりのある品々が展示されている。

★谷徳製紙所

名塩紙の特徴を生み出す、名塩周辺で採れる凝灰岩。左から、黄(尼子土)、白(東久保土)、青(カブタ土)、茶(蛇豆土)。

写真左/西宮市立郷土資料館・学芸員の原康生さん。写真右/谷徳製紙所の谷野雅信さん。

谷徳製紙所
兵庫県西宮市名塩2-2-23
TEL:0797-61-0224(紙漉き体験も可・要予約)

★名塩八幡神社

創建年は不明だが、文明年間(1469~1486)以前と推定される。現在確認できる一番古い年号は、石の鳥居の寛延4(1751)年の銘。明治12年には、岩倉具視が石灯笼一對と提灯一對を奉納している。専任の神職がおらず、塩田八幡宮の神職が兼任して神事を執り行い、通常の神社の管理は「宮守(みやもり)」と呼ばれる地域の7町から選出された氏子が担う。毎年、成人の日の1月15日に近い日曜日が祝日に行なわれる左義長(とんど)は、高さ5m~6mの円錐形に組み上げた竹に早朝4時半頃から点火して行われ、多くの人々で賑わう。

★名塩八幡神社

★木之元地蔵尊 木元寺

聖徳太子が鎮護国家のため、一木で三体の地蔵尊を刻み3カ所に納めた。その一体が名塩の木元寺にある木之元地蔵尊であると伝えられる。室町時代、摂津、播磨、備前美作を支配する守護大名だった赤松則村円心が、勝軍地蔵として伽藍をここに創建。地蔵尊が火事で赤ん坊にふりかかる炎を懸念に払って命を守ったという伝説が残り、「火伏地蔵」と呼ばれ親しまれる。その時に付いた傷跡が、今も地蔵尊の頬と左の衣に残っているとされる。

★ウエルキンソン記念館

イギリス人の実業家クリフォード・ウィルキンソンが、明治22年ごろ宝塚で炭酸鉱泉を見つけて「炭酸水」の製造・販売を開始。明治37年、源泉が枯渇したため、鉱泉水がふんだんに湧き出す西宮市生瀬に工場を移転した。白い外壁、赤い柱が印象的な工場は、西宮北部のランドマークとして長く愛された。平成2年に工場は閉鎖、平成7年に解体。跡地にウエルキンソン記念館が建設され、ウィルキンソンにゆかりのある品々が展示されている。

★谷徳製紙所

名塩紙の特徴を生み出す、名塩周辺で採れる凝灰岩。左から、黄(尼子土)、白(東久保土)、青(カブタ土)、茶(蛇豆土)。

写真左/西宮市立郷土資料館・学芸員の原康生さん。写真右/谷徳製紙所の谷野雅信さん。

谷徳製紙所
兵庫県西宮市名塩2-2-23
TEL:0797-61-0224(紙漉き体験も可・要予約)

★名塩八幡神社

創建年は不明だが、文明年間(1469~1486)以前と推定される。現在確認できる一番古い年号は、石の鳥居の寛延4(1751)年の銘。明治12年には、岩倉具視が石灯笼一對と提灯一對を奉納している。専任の神職がおらず、塩田八幡宮の神職が兼任して神事を執り行い、通常の神社の管理は「宮守(みやもり)」と呼ばれる地域の7町から選出された氏子が担う。毎年、成人の日の1月15日に近い日曜日が祝日に行なわれる左義長(とんど)は、高さ5m~6mの円錐形に組み上げた竹に早朝4時半頃から点火して行われ、多くの人々で賑わう。

★名塩八幡神社

★木之元地蔵尊 木元寺

聖徳太子が鎮護国家のため、一木で三体の地蔵尊を刻み3カ所に納めた。その一体が名塩の木元寺にある木之元地蔵尊であると伝えられる。室町時代、摂津、播磨、備前美作を支配する守護大名だった赤松則村円心が、勝軍地蔵として伽藍をここに創建。地蔵尊が火事で赤ん坊にふりかかる炎を懸念に払って命を守ったという伝説が残り、「火伏地蔵」と呼ばれ親しまれる。その時に付いた傷跡が、今も地蔵尊の頬と左の衣に残っているとされる。

★ウエルキンソン記念館

イギリス人の実業家クリフォード・ウィルキンソンが、明治22年ごろ宝塚で炭酸鉱泉を見つけて「炭酸水」の製造・販売を開始。明治37年、源泉が枯渇したため、鉱泉水がふんだんに湧き出す西宮市生瀬に工場を移転した。白い外壁、赤い柱が印象的な工場は、西宮北部のランドマークとして長く愛された。平成2年に工場は閉鎖、平成7年に解体。跡地にウエルキンソン記念館が建設され、ウィルキンソンにゆかりのある品々が展示されている。

★谷徳製紙所

名塩紙の特徴を生み出す、名塩周辺で採れる凝灰岩。左から、黄(尼子土)、白(東久保土)、青(カブタ土)、茶(蛇豆土)。

写真左/西宮市立郷土資料館・学芸員の原康生さん。写真右/谷徳製紙所の谷野雅信さん。

谷徳製紙所
兵庫県西宮市名塩2-2-23
TEL:0797-61-0224(紙漉き体験も可・要予約)

★名塩八幡神社

創建年は不明だが、文明年間(1469~1486)以前と推定される。現在確認できる一番古い年号は、石の鳥居の寛延4(1751)年の銘。明治12年には、岩倉具視が石灯笼一對と提灯一對を奉納している。専任の神職がおらず、塩田八幡宮の神職が兼任して神事を執り行い、通常の神社の管理は「宮守(みやもり)」と呼ばれる地域の7町から選出された氏子が担う。毎年、成人の日の1月15日に近い日曜日が祝日に行なわれる左義長(とんど)は、高さ5m~6mの円錐形に組み上げた竹に早朝4時半頃から点火して行われ、多くの人々で賑わう。

★名塩八幡神社

★木之元地蔵尊 木元寺

聖徳太子が鎮護国家のため、一木で三体の地蔵尊を刻み3カ所に納めた。その一体が名塩の木元寺にある木之元地蔵尊であると伝えられる。室町時代、摂津、播磨、備前美作を支配する守護大名だった赤松則村円心が、勝軍地蔵として伽藍をここに創建。地蔵尊が火事で赤ん坊にふりかかる炎を懸念に払って命を守ったという伝説が残り、「火伏地蔵」と呼ばれ親しまれる。その時に付いた傷跡が、今も地蔵